

# い刑所持で逮捕、服役 田代まさしさん語る

覺せい刑所持などの罪で3年半の刑務所生活を送り、昨年6月に出所した元タレントの田代まさしさん(52)が、服役中の思いや薬物から離脱する決意などを語った。番号で呼ばれて作業を延々とこなし、人間らしく扱われなかった刑務所での日々は「地獄のよう」。戻りたくない意志は固いといい、「もう二度とクスリには手を出さない」と繰り返した。(岩岡千景)

バナマ帽に、ギンガムチエックのシャツ。東京都内で会った田代さんは黒が基調の服に身を包み、少しやせているが、健康そうにみえた。自らを「ハリバリの小心者です」と紹介。うつむき、不安げな表情から繊細さが伝わる。「本当はもう思い出したくもないんですけど」と前置きし、語り始めた。

「刑務所は軍隊のよう。「八三九番」と番号で呼ばれて人間らしく扱われず、精神がおかしくなりそうだった。田代さんは昨年六

## 刑務所 軍隊のよう

### 「839番」と呼ばれ、単純作業を延々

四年九月、再び覺せい刑所持容疑で東京都内で逮捕。○五年二月に東京地裁で実刑判決を受けたのだ。

刑務所では、平日は朝六時半に起床。刑務官による点検や朝食、工場での就業などのスケジュールが分刻みで組まれ、機械的に動くことを強いられた。「食事はまずいし、冷暖房がなくて冬は寒く、夏は暑くて眠れない。すべてがつまらかった」。苦痛を表現しきれないのとほかに、「すべて」に力を込める。

耐え難かったのは工場での作業。顔が知られた田代さんは、刑務所側の配慮で、障害者や高齢者の多い少人数の工場に配属された。仕事は、封筒や追花作り。「紙を折り、ひもを結ぶだけの単純な作業が毎日、延々と続く。ポツとすると監督者に注意される。時間を長く感じ、早く出て楽になりたいと、ずっと考えていた」

出所者の情報からか、服役中の自分を「目がつうつろで廃人のよう」と書いて週刊誌コピーをファンから送られて目にし、心を痛めたことも。「そんな作業を自を輝かせてやってる人なん

### 家庭失う中、支えてくれる友人ら

## 更生こそが恩返し

まっとうしたが、厳しい現実には直面した。精神的に追い込まれた妻が申し立てた離婚が服役中に成立し、家庭を失ってしまった。普通に就職しようとしても「年齢も高いし元犯罪者。そんな人間を雇ってくれるところなんてない」と、途方に暮れた。

◆ ◆ ◆

だが一方で「こんな僕でも支えてくれる人たちがいました。二人の妹は身元を引きました。友人は食事に誘った。トークライブへの出演や雑誌連載など仕事を提供した。知人もいた。高校時代からの友人で、田代さんを支えてくれた。高松時代に、覺せい刑を何年も常習してはおらず、刑務所でも芸能活動に誘い入れた「ラッツ&スター」リーダーの鈴木雅之さんは「今、おまえに必要なのは、厳しくしつとてくれる人だ」と親身

に助言。雑誌で対談したりして、それが向うに「覚せい剤のせい」といわれた方が薬物から離れられ、睡眠薬の副作用だって「今も応た。もともと神経質で眠り授けられている」と、ファンも手紙を寄せていた。出所直後にまた会見では、それらが向うに「覚せい剤のせい」といわれた方が薬物から離れられ、睡眠薬の副作用だって「今も応た。もともと神経質で眠り授けられている」と、ファンも手紙を寄せていた。

「クスリに手を出さずにまじめに生きていくことが、支えてくれた人たちへ「恩返し」。田代さんはそ

「その時、どう聞かか



服役中の生活を振り返る田代まさしさん=15日、東京都新宿区で

# 覚せい

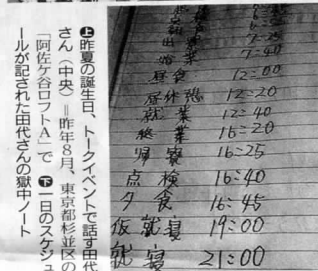
「た。田代さんは昨年7月二十六日に出所するまで三年半、栃木県の黒羽刑務所で服役した。覚せい剤所持などで懲役二年の判決を受け、執行猶予中の二〇〇



たしろ・まさし 1956年、佐賀県生まれ。80年、鈴木雅之さんとシヤネルズ(後にラッツ&スター)を結成、デビュー曲「ランナウェイ」などがヒット。志村けんさんとのコンビで、お笑いタレントとしても活動。2000年に盗撮事件、01年にのぞきや覚せい剤所持事件などを起こし、02年、Vシネマ監督で復帰。04年、再び覚せい剤所持事件を起こして服役した。

て、一人もいなくなった。苦悩を吐き出すように、早口になる。

それでも「出れば明るい社会が待っている」と刑を



●昨夏の誕生日、トークイベントで話したまさし(中央)。「昨年8月、東京都杉並区の「阿佐ヶ谷クラブ」で●1日のスケジュールが記された田代さんの獄中ノート

う言って、「前に進んでいく姿を見守っていてほしい」と話す。

覚せい剤に手を出したのは「精神的な弱さから」と。田代さんは思い出したくない過去を振り返るのも一度、自分のイヤな部分を見つめてうみを出し、やり直したい気持ちから、という。話が進むにつれ、こちらを気遣うように、冗談を交えて話す田代さん。最後に、自りに言い聞かせるように繰り返した。「刑務所には戻りたくない。もう二度と、クスリには手を出しません」

## 薬物依存症の治療をする

「アパリ・クリニック」の上野(東京都台東区)の山田幸子院長は「薬物の再犯防止に関する講習を受講し、本人にやめたい意思があっても、まだ手を出してしまつてがあるのが覚せい剤などの薬物の難しさ」と話す。薬物を使う人には「精神的に追いつまれた時に対処しきれず、気持ちをまきさらわせたために薬物に走るパターンが多い」とい

## 薬物再犯防止へ識者指摘

# 収監方法見直し 治療を重視して

摘する。刑務所が軍隊のようで、精神的に追いつまれないのはその通り」と話すのは法務省の刑務所改革にも関わった菊田幸一・明治大名誉教授(犯罪学、弁護士)。「だが二度と戻らぬまい」と思っても再び入る人は多く、中でも覚せい剤事犯者に多いのも現実」と言う。二〇〇七年の覚せい剤取締法違反者(二万一千七百四人)の57・1%が同罪での前科があるとされ

「薬物依存症を抱えた人が多い薬物事犯者を、他の刑法犯と一緒に収監する日本」のやり方は疑問。治療や職業訓練をする施設に入る選択肢がある米国のようなシステムを、と菊田氏(「全受刑者の二三分を占める薬物事犯者は刑務所の過剰収容の要因でもある」と付け加えた。

この不況下、刑務所の受注作業も減っている。受注に躍起になる所も、余った時間を薬物依存の回復に充てるべきです(菊田氏)